

転生王子は TENSEIOJIHA DARAKETAI
ダラけたら 20

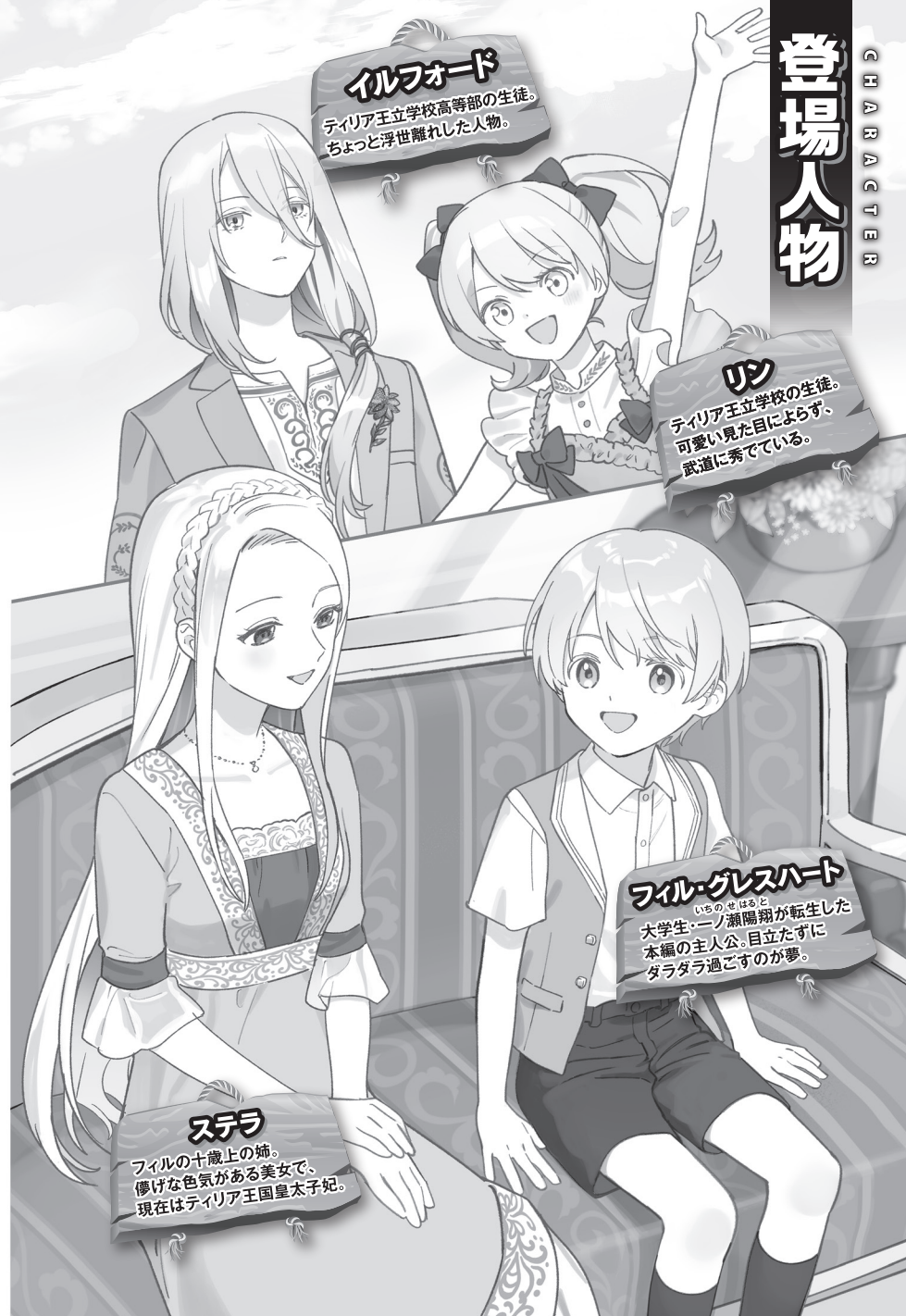


朝比奈 和

Asahina Nagomu



フィルの仲間たち



イルフォード
ティリア王立学校高等部の生徒。
ちょっと浮世離れた人物。

リン
ティリア王立学校の生徒。
可愛い見た目によらず、
武道に秀でている。

フィル・グレスハート
いちのせはると
大学生。一ノ瀬陽翔が転生した
本編の主人公。目立たずに
だらだら過ごすのが夢。

ステラ
フィルの十歳上の姉。
優雅な色気がある美女で、
現在はティリア王国皇太子妃。

1

三年生の先輩たちが卒業して、俺——フィル・グレスハートが通うステア王立学校は夏休みに入った。

ステア王立学校の夏休みは、一ヶ月と少し。充分な休暇のように思えるが、実際は違う。

グレスハート王国の第三王子でありながら、普段は鉱石屋の息子、フィル・テイラとしてステア王国に留学している俺のような生徒にとって、一ヶ月と少しはやや短い。

帰省を考える場合は、移動日数込みで予定を立てなければならぬからだ。

近い国ならいいけど、人によっては行き帰りで一、二週間もかかる留学生もいるしなあ。

移動にそれだけかかるって、結構大変だよな。

そういった生徒の中には、帰省せずに寮に残る者も多い。

俺も去年に引き続き、グレスハートには帰省しないことにした。

飛獣とも呼ばれるウォルガーのルリを召喚獣にしているので、空を飛んでビューンと帰ることはできる。

でも、今年は友人のレイとトーマとライラ、幼馴染みであるアリスや従者のカイルと一緒に過ご

すつもりだった。

しかも、隣国のティリア王国にいるステラ姉さんの別荘を拠点とし、いろいろと出かける予定なのである。

冬休みに帰省した時に実家の父さんにはこの夏の予定を伝えておいたから、すぐに許可は下りた。まあ、『友人との夏休みを楽しめ』という言葉と共に『ただし、楽しいからといって羽目を外すことがないように』との忠告も付いてきたけれど。

本当に心配症なんだから。

今だって、ちゃんと学生としての本分を忘れず、真面目に夏休みの宿題をやっているというのに。

そう。帰省する生徒たちが出立した中、俺たちはまだステア王立学校に留まっていた。

レイの「休みを思いっきり楽しむために、夏休みの初めにできるだけ宿題を終わらせちゃおうぜ!」という提案に、皆が賛成したのだ。

そして今、寮の裏の森の中にある小屋に集まり、俺たちは宿題をしている。

よし、ようやく目標達成表を書き終えたぞ。

課題の一つである目標達成表は、夏休み中にやりたいこと、頑張りたいことなどをリストに書き出し、最終日にどれだけ達成できたかを記入するというものだ。

自分なりに『簡単』『普通』『難しい』の三つにレベル分けし、それぞれ五個ずつ考えなくてはならない。

普段できないことを目標にしたら、『召喚獣のお世話をする』とか、『動物をモフモフする』とか、『新しい動物を見つける』とか、『何も考えずのんびり過ごす時間を作る』とか、願望が詰まった目標になっちゃった。でも、達成できたらいいなあ。

俺が目標達成表を見つめていると、それを覗き込んだカイルが、不安そうな顔で俺に尋ねる。

「これは……達成できますかね?」

そう言って指さしたのは、俺の目標である『事件に巻き込まれない』だ。

「できるよ。……た、多分」

もともと返す俺を、カイルは疑わしげな目で見てくる。

うう、し、視線が痛い。

自信を持つて答えたいけど、こればかりはわからないだよ。

だって、いつの間にかトラブルに巻き込まれているんだもん。

その自覚があるからこそ、達成難易度も『難しい』にしている。

「ほ、本当に大丈夫。今年の夏休みは、皆と一緒だからね。事件に巻き込まれないよう、特に気をつけようと思ってるよ」

安心させようと、俺はにつこりと笑ってみせる。

しかし、それが余計にカイルの不安を煽ったようだ。

カイルは意を決した顔で、自分の目標達成表に力入りと書き込み始めた。

すでに『簡単』『普通』『難しい』の項目は埋まっているようなのに、いったい何を付け加えるの

だろう。

俺が首を傾^かげていると、カイルは書き終えた目標達成表を突き出した。

「俺も目標に『フィル様が事件に巻き込まれないようにする』と追加しました！」
書かれている内容を確認して、俺は慌^{あわ}てる。

「本^{ほん}当^{とう}だ、追加してるっ！ しかも、『非常に難しい』って項目を新しく作ったの!?」
驚^{きやうがく}愕^{がく}していると、カイルは悲しそうな顔で頷^{うなず}いた。

「はい。『難しい』の区分では、達成できそうになかったのだからって、わざわざ項目を作らなくなっ^たっていいのに……」。

「僕に関する目標じゃなくて、自分の目標を書こうよ」

説得^{せとく}するが、カイルは首を大きく横に振った。

「いえ、フィル様を事件に関^{かん}わらせ^なせないこと。これは従者としての俺の永遠の目標なんです。いつも達成できないので、今回の夏^{なつ}休みこそ達成させたいんです！」

そう言^いって、グツと力強^{こゝろ}く拳^{こぶし}を握^{にぎ}る。

カイルの姿や表情からは、今までの悔^くしさがにじみ出^でていた。

「い、いつも達成させてあげられなくて、悪いと思^{おも}ってるよ」

わざとではないんだが、申し訳^{わけ}ない気持ちになる。

すると、俺とカイルの会話を聞いていたのか、トーマはのほほんと笑^{わら}って言う。

「フィルは困^こっている人がいると、放^{はな}っておけない性格だもんね。夏^{なつ}休みは、困^こっている人に出会



わないといいねえ」

その言い方はやめて、フラグ立っちゃうから。
うーむ、トラブル退散のお祓いが必要かな。それとも、困っている人が現れないように祈つとく？

俺がそんなことを考えていると、カイルがふと窓を振り返った。

「二人、訪問者が来たようですね」

蝙蝠の獣人であるカイルは、人の気配をいち早く察したようだ。

「お客様？」

首を傾げる俺に、カイルは気配を窺いながら答える。

「殺気は感じられないので、客人だと思います」

いったい誰だろう。

小屋で宿題をしていることは、寮母さんに伝えてある。

帰省せずに残った同級生が、一緒に宿題をするためにやって来たのかな。

レイは窓に視線を向け、少し眉根を寄せた。

「さつそく困っている誰かが、フィルに助けを求めに来た……とか？」

タイミングがタイミングだけに、なんかそんな気がしちゃうよね。

「とりあえず、お出迎えしてくるよ」

敷地の塀にある扉に鍵をかけてきちゃったから、来客は入ってこれないんだよね。

俺とカイルは居間を出て、小屋の外へ向かった。

塀に到着したのと同時に、呼び鈴がカランコロンと鳴る。

「はあーい！ 今開けます！」

俺は返事をして、開錠した扉を開ける。

そこには、鉱石学担当教諭のシエナ先生と、ライオネル・デュラント先輩が立っていた。

デュラント先輩はステア王国の第三王子で、夏休みが明けたらステア王立学校の高等部一年生になる。先日中等部を卒業したあとは、中等部男子寮を退寮し、現在はステア王城に帰省していた。

「こんにちは。急に来てごめんね。しかも、学校訪問のついでにシエナ先生に挨拶に行ったら、

『一緒に行く』ってついてきちゃって」

申し訳なさそうなデュラント先輩に、俺は首を横に振る。

「いえ、歓迎します」

でも、シエナ先生がくつついてくるなんて珍しいな。

シエナ先生は普段、鉱石学の教務担当室に引きこもっていることが多い。

自分の部屋で、大好きな鉱石の研究をずっとしていたみたいなんだよね。

それもあるって、教師の仕事を引き受ける際、教務担当室の隣の部屋を自宅として購入するという条件を出したほどだ。

校舎を出るのは、学校敷地内にあるステア王立学校図書館か、学会のために他国へ行く時くらい

じゃないかな。

それくらい、研究に関する以外で滅多に出歩かない人なんだ。

もしかして、何か困りごと？

俺の頭に、さっきレイが言っていた『さっそく困っている誰かが、フィルに助けを求めに来た』という言葉が浮かぶ。

い……いやいや、そうとも限らないよね。

そう考えて、俺は二人に向かって微笑んだ。

「まずは、お茶を用意しますから、どうぞ中へ」

二人を敷地内に招き入れ、小屋へ案内する。

小屋の扉を開けると、レイたちが横一列に並んで待っていた。

皆は声を揃えて、二人に挨拶する。

「……いच्छいませ」

窓から誰が来たか確認し、出迎える準備をしていたのだろう。

「さあ、どうぞどうぞ！」

レイはそう言いながら、居間のソファを手のひらで指し示す。

先程までテーブルに広げられていた宿題や本は、部屋の隅にある棚の上にとめられていた。

お客様が来るからと、急いで片づけてくれたらしい。

レイがソファにクッションを置き、そこにシエナ先生たちを案内する。

少し遅れてアリスとライラが全員分の飲み物を、トーマがお茶菓子のクッキーを持ってきた。準備する時間はろくになかったのに、連携がすごいな。

デュラント先輩は俺たちの顔を見回して、にこっと笑う。

「突然の訪問なのに、もてなしてくれてありがとう。寮母さんから宿題をしていると聞いたよ。邪魔をして申し訳なかったね」

デュラント先輩の言葉に、俺たちは「いえいえ」と揃って首を振る。

「大丈夫です。宿題はだいたい終わっていますから。それで、今日は僕たちに何か用事があっていらしたんですか？」

俺が尋ねると、デュラント先輩は懐から白い封筒を取り出し、それを差し出した。

「フィル君とカイル君に、これを届けに来たんだ」

手紙には赤い蠟で封がされている。そこには、とある印章がはっきり刻まれていた。

三つの頭がある鳥、ステア王国に伝わる伝説の鳥であるアルメテロスのマークだ。

ステア王立学校の校章にもアルメテロスが使われているが、この印章は装飾がもっと細かい。

これ、ステア王室のマークだ。

……ということは、ステア王室から俺とカイルに宛てた手紙!?

俺は封筒を受け取って、カイルと顔を見合わせる。

恐る恐る封を切り、中に入っている紙を取り出した。

送り主は、ステア王国テレーズ女王陛下——デュラント先輩のお祖母さんからだ。

手紙には、秘薬^{ひやく}のレシピ入手に力を貸^かしたことへの感謝^{かんしゃ}が綴^{つづ}られていた。この秘薬^{ひやく}というのは、伝説の鳥アルメテロスから伝承された特別な薬のこと。

デュラント先輩は体調^{くす}を崩しやすく、運動ができないほど体が弱い。ステアの王族の中には、デュラント先輩のような体質の方が、時々いらつしやるのだという。そんな王家の助けとなっていたのが、アルメテロスが授けた秘薬のレシピだった。

おかげでデュラント先輩のご先祖様は体質を改善し、健康に過ごしていたそうなんだよね。

秘薬のレシピはステア王家にとって、特別で大事なものの。

しかし、厳重に保管されていたものの、何代か前に火事で焼けてしまったらしい。

秘薬以外の体質改善の手立てを探していたデュラント先輩だが、有力な手段を見つけることができなかった。

グレスハート王国のマクリナ茶を飲んでもらっているけれど、風邪^{かぜ}などを予防する効果はあっても、残念ながら体質改善には至^{いた}らないもんなあ。

それで、デュラント先輩はアルメテロスからもう一度、秘薬のレシピを教えてもらうことができないかと考え始めたみたいなんだよね。

実在するかもわからない伝説の鳥を探すくらいなんだから、薬^{わら}にも縋^{すが}る思いだったのだろう。

その話を聞いた俺は、アルメテロス探しを手伝おうと決めたのだ。

デュラント先輩が見当をつけたアルメテロスの棲^{すみ}処は、アルメティ神殿^{しんでん}の最深部。

そこは、精霊^{せいれい}にしか開けることができない特別な扉があり、数百年もの間、閉ざされていた。

今は昔に比べて、精霊の数も減少している。精霊のヒスイと召喚契約をしている俺がお手伝いしなかったら、扉を開けることはできないだろう。

俺は動物と直接会話ができるから、アルメテロスと会えた時もお役に立てると思ったしね。

それで、マクベアー先輩とデュラント先輩、デュラント先輩のお兄さんのセオドア殿下と一緒に、俺とカイルはアルメティ神殿へ行ったのだった。

実際にアルメテロスと出会えた時は、驚嘆^{きょうたん}したなあ。

だって、数百年前に姿を隠してから、目撃情報^{もくげき}が一切なかったんだよ。

アルメティ神殿にいると探り当てたデュラント先輩は、本当にすごいと思う。

こうして、俺たちは秘薬のレシピを無事に教えてもらうことができたんだ。

「先日の探索では、フィル君やカイル君にとってもお世話になったから、お祖母様は直接お礼を伝えたいらしくてね。城に招待したいそうなんだ」

デュラント先輩はそう言って、優しく微笑む。

レイとトーマとアリスとライラは、「うわあ!」「すごい!」と感嘆の声を上げた。

ステアの王城を見学^{けんがく}したいと思っていたから、正直嬉しい。

でも、女王陛下^{じきき}直々にお礼を言われるだなんて、恐縮^{きょうしゆく}してしまう。

カイルは困った顔で、デュラント先輩に言う。

「フィル様はともかく、俺は同行しただけで、あまりお役に立てなかったと思うんですが……」

その言葉に、デュラント先輩は笑みを深めた。

「そんなことないよ。カイル君は私を励まし、力になってくれた。君がいてくれて心強かったよ」
デュラント先輩が、俺とカイルの顔を窺う。

「君たちが来る日は、マクベアーも呼ぶから気負う必要はない。堅苦しく考えずに、来てくれないかな？」

そう言つて、不安そうに俺たちを見つめた。
うう、その表情はすごい。

レシピ入手後に、デュラント先輩とセオドア殿下からたくさんお礼を言われた。

女王陛下からこうして感謝の手紙もいただいたし、正直、これ以上のお礼は必要ないと思つて
いる。

だけど、そんな顔でお願いをされたら、断れないよお。

俺はカイルと視線を交わし、それからデュラント先輩に向き直つて頷いた。

「わかりました。伺わせていただきます」

「よろしくお願いいたします」

俺とカイルが頭を下げると、デュラント先輩は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「よかった。お祖母様はもちろん、両親や兄達も、君たちに会うのを楽しみにしているんだ」

「え!! ご家族の方々も同席されるんですか?」

女王陛下だけじゃなくて、ステア王家の皆さんが勢揃い!?

デュラント先輩はコクリと頷く。

「うん。皆、感謝を伝えたいって。あれ? 手紙に書いてない?」

俺が慌てて、手紙を再確認すると、最後のところに『会える日を、皆も楽しみにしています』と
書いてあった。

み、見落としてた……。

ステア王家勢揃いか、さらにハードル上がるな。だけど、今さら断れないよね。

もしかして、手紙には書くことのできない、アルメテロスの件で相談があるのかもしれないし。

ステア王国の伝説の鳥アルメテロスが実在していたことは、世間に公表されていない。

アルメテロスの存在や居場所は、探索でアルメテロスと会った俺たちと、ステア王家の方々だけ
の秘密となっている。

もちろん、レイたちやシエナ先生にも話していない。

レイたちに話したのは「デュラント先輩の体質を改善する薬の材料探しを、俺とカイルで手伝っ
た」ということだけ。シエナ先生にも、デュラント先輩がそう説明したはずだ。

ステア王家の秘薬に関する案件だし、何よりアルメテロスがひっそり暮らしたいと望んでいるか
らね。

伝説の鳥が実在するとわかれば、アルメテロスは平穏な生活を送れなくなるもん。

ステア王家の恩人に対して、恩を仇で返すような真似はできない。

だから、アルメテロスに会いに行けるのは、存在を知った人間たちだけってことになっている
んだ。

動物好きなトーマに教えてあげられないのは、ちょっと可哀想だけどね。

シエナ先生は……絶対に教えちゃいけない気がする。探究心の塊であるこの人に教えたら最後、アルメテロスのごとくに日参して、質問攻めにするかもしれないからなあ。

そんなことを思いながらシエナ先生を見ると、クッキーを摘まんでいた彼女と目が合う。

「なんだ？」

やば、気づかれた。

なんだって聞かれても、考えていた内容を正直に口にするわけにもいかない。

俺は別の質問で誤魔化すことにした。

「あ、いえ、その……シエナ先生は、デュラント先輩のご家族にお会いされたことはあるのかなと思つて」

俺自身は、テレーズ女王陛下とデュラント先輩のお父さんのマイラス皇太子、長兄のセオドア殿下にはお会いしたことがある。

だけど、デュラント先輩のお母さんのアンヌ皇太子妃と、二番目のお兄さんのイグナシス殿下にはまだなんだよね。

シエナ先生は教師になる前、体の弱いデュラント先輩の話し相手としてステア王室に招かれていたというから、その時にご家族と顔を合せているのかな？

この推測は当たっていたようで、シエナ先生はクッキーを口に入れて頷いた。

「あるぞ。ステアの王族は皆、学問を愛し、探究心に溢れているから、話をしていて面白い。特に

テレーズ女王陛下は博識で、ご自身の立場に囚われず、誰からでも学ぼうとする謙虚な姿勢を持つていらつしやる素晴らしい方だ」

シエナ先生がこんなに人を褒めるなんて……。

正直、驚いた。シエナ先生って、好きな人と嫌いな人の区別がはっきりしているタイプなんだよね。

それだけ、テレーズ女王陛下は素晴らしいお人柄なのか。

シエナ先生の言葉に、デュラント先輩も少し驚いたようだ。

「そんなふうに思っていてくださるとは知りませんでした」

すると、シエナ先生はちよつと眉根を寄せた。

「私だって、誰かを尊敬する心くらいはある。テレーズ女王陛下は、私のライオネルへの接し方を咎めることもなく、教員になるための条件も全て呑んでくださった。ああいった心の広い方は、なかなかいない」

デュラント先輩は懐かしそうに目を細める。

「私がシエナ先生を教員に迎えるために交渉した時の、あの条件ですね」

任期は五年。学校の一室を、自宅として買い取る。

学校行事や催事には参加しない。教員としての雑務もしない。

授業以外の時間は、研究にあてさせること。

授業内容についての指図や文句は受けつけない……だっけ。

「ライオネルは私が提示した条件を全て呑むと言ったが、テレーズ女王陛下が許可すると思っていなくてな」

ため息を吐くシエナ先生に、レイは言う。

「無茶な条件を出した自覚は、あったんですね」

シエナ先生はジロツとレイを睨む。

「前にも言っただろう。ガキ共はうるさいし、教員などになれば面倒も多い。研究が滞るなんてまっぴらだったからな。難しい条件を出せば、いくら可愛い孫の頼みでも女王陛下が断ると思ったんだ」

肩をすくめるシエナ先生に、デュラント先輩がくすつと笑う。

「愛情深い祖母ですが、私情を挟む方ではありませんよ。シエナ先生の鉱石の知識は、ステア王立学校の生徒たちに必要なものだと思われたのでしょうか」

シエナ先生の鉱石学知識は、この世界でもトップレベルだもんなあ。

俺たちがこうして最新の鉱石学が学べるのは、デュラント先輩とテレーズ女王陛下のおかげということか。

お城に行つてテレーズ女王陛下に会ったら、俺も感謝を伝えよう。

そんなことを思いながら、招待状に視線を落とす。

内容にもう一度目を通して、それからデュラント先輩に尋ねた。

「デュラント先輩、この手紙には日付が記載されていないみたいなのですが。いつ伺えばいいので

しょうか？」

俺が聞くと、デュラント先輩は微笑む。

「お祖母様は『いつでもいい』とおっしゃっていたよ。フィル君とカイル君とマクベアーの都合のいい日で構わない」

いつでもいいって、一番困るな。

学生の俺たちよりも、公務があるステア王族の皆さんのほうが忙しいのだろうし。

んー、俺とカイルはステアを出立したら、夏休みが終わるギリギリまでティリアに滞在するつもりなんだよね。

マクベアー先輩の予定はどうなんだろう。

長期休みの時、マクベアー先輩はいつも、他国で開催される剣術大会に出場していた。

しかも、一つだけじゃなくて、いくつも。

彼の予定によつては、早めにステアに戻ってきたほうがいいのかな。

「マクベアー先輩は今年、どの剣術大会に出場するんだろう」

俺の独り言が聞こえたのか、デュラント先輩が教えてくれる。

「今年は夏休み後半にある、ドルガドの剣術大会成年の部一つだけみたいだよ」

「え、一つだけですか？」

「毎年、いくつも参加されてますよね？」

驚く俺とカイルに、デュラント先輩は苦笑する。

「このあたりの大会は、ほとんど殿堂入りしてしまったらしい。連続で優勝していたからね」
「殿堂入り!?」

俺は目を大きく見開いた。

同年代ではライバルがいらないから、数年前から成年の部に出場していると聞いていたのに。まさか、成年の部でも殿堂入りしてしまうとは。

「さすがマクベアー先輩ですね」

カイルが感心したように呟き、レイとトーマとアリスとライラも頷く。

「だから、夏休みの終盤以外はステアで鍛錬をしていると思う」

そう話すデュラント先輩に、俺はホッとする。

「僕たち、夏休みはティリアへ行くつもりなんです。学校が始まる少し前に帰ってくる予定なので、夏休み前半の日程だと嬉しいです」

新学期が始まってからだと、予定が合わせにくくなるかもしれないなあ。

「でも、明日や明後日だとさすがに急ですかね？」

俺がデュラント先輩の顔を窺いながら尋ねると、優しく微笑まれた。

「うちは問題ないよ。このあと、マクベアーに会いに行くから、フィル君たちの希望を伝えるよ。多分、大丈夫だと思う」

「ありがとうございます」

俺とカイルはペコリと頭を下げる。

「ちなみに、ステアはいつ出る予定なんだい？」

デュラント先輩の質問に、俺はチラッとレイを見た。

「えっと、荷物がまとまり次第の予定なんですけど……。ただ、支度がまだな人もいるので、早くても三日後ですかね」

俺の言葉を聞いて、シエナ先生が首を傾げる。

「準備にそんなに時間がかかるのか？」

肩をすくめたライラが、隣のレイをジロリと睨む。

「レイが旅行に持っていく服を新調したんですけど、出来上がるのが明後日らしいんですよ。それを待つてからの出立なんです」

それを聞いて、シエナ先生は目を瞬かせる。

「わざわざ新調したのか？　どんな服だっていいだろう」

なんとなくそんな気がしていたけど、シエナ先生はお洒落に興味がないようだ。

シエナ先生はいつも、白衣っぽい白のロングコートに、タイトなロングワンピースという服装。ワンピースの色や形は多少違うものの、だいたい同じ雰囲気だまとまっているんだよね。

多分、お洒落に時間をかけるのが億劫なんだろうな。

「レイ・クライス。人間、中身が大事だぞ？」

シエナ先生の指摘に、レイは反論する。

「それは、充分わかってますけど、印象も大事でしょう？　フィルのお姉様やお義兄様のところに、

お世話になるんですよ。ちゃんとした格好で挨拶したいじゃないですか」

「ああ、なるほど」

デュラント先輩が相槌^{あいづち}を打つ。彼は俺がグレスハートの王子だと知っているので、その姉と義兄がティリア皇太子夫妻を指すとわかったのだろう。

「フィル君のお姉さんのところに滞在するのなら、レイ君が気にする気持ちもわかるかな」
デュラント先輩という味方を得て、レイは嬉しそうに笑った。

「そうでしょう？」

ステラ姉さんからは、『別荘だからラフな格好で構わない』と言われてるんだけどな。

「レイは普段からお洒落なんだから、いつものでいいのに」

俺の呟きに、レイは首を横に振る。

「いいや！ 普段着にもいろいろあるんだ。自信の持てる、勝負服で向かいたい！」

グツと拳を握るレイを見て、トーマが泣きそうな顔になる。

「どうしよう。僕、勝負服じゃない……」

俺は慌ててトーマを宥^{なだ}める。

「大丈夫だよ。本当に普通の服でいいから」

「ええ、レイに合わせなくていいのよ。多分、お洒落に気を使っているのには、もう一つ理由があると思うから」

ライラが隣に視線を向けると、レイはギクツと肩を震^{ふる}わせた。

アリスが大きな目で、レイの顔を覗き込む。

「別の理由があるのか？」

「あ……それは、その……」

モゴモゴと話すレイに、ライラはズバツと指摘する。

「ティリアの市場を観光するから、お洒落しようと思ってるんでしょ」
当たっていたようで、レイは「うっ！」と言葉を詰まらせた。

「最先端の服が揃うティリアの市場だぞ。お洒落していききたいだろ。でも、一番の理由はお挨拶のためだから！」

必死に訴^{うった}えるレイに、俺はくすつと笑う。

「わかっているよ」

でも、お洒落好きなレイにとっては、二番目の理由も大事なんだろうな。
自信のある服装でお出かけしたい気持ちはわかる。

すると、話を聞いていたシエナ先生が、少し身を乗り出した。

「ティリアの市場に行く予定があるのか？」

そう尋ねるシエナ先生の表情は、どこか嬉しそうだ。

鉱石研究の話をしている時以外は、いつも伏^ふし目がちで気怠^{けだる}げなのに。

「市場をいろいろと見て歩く予定です」

ライラが答えると、シエナ先生は「そうか」と呟きニヤリと笑う。

俺は尋ねずにはいられなかった。

「な、なんですか。その笑顔は……」

「ちようどいいと思つてな」

シエナ先生はそう言つて、にこりと微笑む。

美人の笑顔は魅力的だ。

しかしシエナ先生の場合、笑顔に裏がありそうでちよつと怖い。

『ちようどいい』とは、俺たちがティリアの市場に行くことができますか？」

カイルの問いに、シエナ先生は頷く。

「ああ。お前たちが夏休みの間、ティリアへ旅行するという噂は聞いていたからな。頼みたいと思つていたことがあるんだ」

それを聞いて、デュラント先輩は呆れ顔だ。

「そのために、私についてきたんですか？」

滅多に外出しないシエナ先生が小屋に来るなんて、俺もおかしいと思つていたんだよね。

「市場に行く時間がないようなら諦めるつもりだったが、行くのならちようどいいだろう？」

そう返したシエナ先生に向かって、カイルは真面目な顔で言う。

「面倒ごとではないですね？ 俺は『フィル様が事件に巻き込まれないようにする』という夏休みの目標を掲げているんです。シエナ先生の頼みであっても、内容によってはお断りしなくてはなりません」

「……」

頼もしい台詞に、俺とレイとトーマとライラとアリスは感嘆の声を漏らした。

俺なんかは、感動のあまり小さく手を叩いたほどだ。

シエナ先生はムツと眉根を寄せる。

「面倒ごとではない。頼みたいのは、ただの買い物だ」

「お使いですか？」

俺が目を瞬かせると、シエナ先生はコクリと頷く。

「ティリアの市場の外れで、ひと月ほど鉱石市をやるそうなんだ。そこで、いろいろ仕入れてきてもらいたい」

「ええ！ 鉱石市!？」

俺はシエナ先生に向かって身を乗り出した。

シエナ先生がニヤリと笑う。

「各国から集まった鉱石や、鉱石に関する書物などが売られているぞ。フィルは特に興味があるだろう？」

「興味があります!」

俺が元氣よく答えると、カイルのため息が聞こえた。

ごめん、カイル。

リスク回避をしてもらったのに申し訳ないが、これは魅力的すぎるお願いだよ。

ライラはチラツとカイルを気にしつつ、シエナ先生に言う。

「私も、興味があります。鉱石市が開催されるのは、とても珍しいですもんね」

鉱石は上手に扱えば、火を熾したり、水を出したりできる、魔法のように便利なアイテム。

しかしその威力は弱く、発動時間も短いということで、一般的には役に立たないものだと思われている。

持続時間を延ばすアイテムも研究されつつあるけれど、まだ商品化には至っていないんだよね。

「そうだ。このあたりで鉱石市が開催されるのは、五年ぶりくらいだな。前はフォリア王国の村でやったんだ。なかなか見られない鉱石もあって、楽しかった」

そう話すシエナ先生の声は、いつになく弾んでいる。

デュラント先輩は不思議そうに首を傾げた。

「楽しかったなら、シエナ先生がいらっしゃればよろしいのでは？ 学校もお休みですし、論文の提出も終えたばかりですよね？」

確かに。楽しかったなら普通は自分で行くよね。

俺たちはシエナ先生をじーっと見つめて、回答を待つ。

シエナ先生はフイツと顔をそらし、ボソツと答えた。

「出かけたくない」

場にしばしの沈黙が落ちた。デュラント先輩は困り顔で言う。

「シエナ先生、そんな理由で生徒にお使いを頼むのはちよつと……」

背けていた顔をデュラント先輩に向け、シエナ先生が訴える。

「だから、フィルたちが市場に行く予定がなかったら諦めていたさ。……仕方がないだろう。前回開催した場所はフォリア王国の村だったから耐えられたが、今回はティリアだぞ？ 色が溢れかえるティリアの町と、たくさん人の煌びやかな人間たち。想像するだけで、疲れる。辛い」

実際に想像してしまったのか、げんなりとした顔つきだ。

ティリアの町って、そんなに色鮮やかなのか。

まあ、シエナ先生って、いつも茶色系でまとめた部屋に一人でこもりつきりだからなあ。

人混みは、辛いかもしれない。

面倒ごととは避けたいが……もともとティリアの市場を訪ねる予定は入っていたし、鉱石市にも行ってみたいしなあ。

チラリとカイルの顔を窺うと、彼はため息を吐いて頷いた。

レイとトーマとアリスとライラも、俺の意を汲んでくれたのかコクリと頷く。

俺は皆に感謝を込めて微笑み、それからシエナ先生に言う。

「そんなに辛いなら、僕たちでお使いしてきますよ」

渋い顔をしていたシエナ先生は、それを聞いてばあつと表情を明るくした。

「そうか！ さすがだな！ 二年間私から鉱石学を学び、鉱石クラブに在籍するだけはある！ 偉いぞー！」

そんなに人の多い場所に出かけるのが嫌なのか。

渾身のレポートを書いた時でさえ、こんなに褒められたことはない。

すっかりご機嫌になったシエナ先生を見て、デュラント先輩が聞いてくる。

「フィル君たち無理していいない？ 断つてもいいんだからね？」

「デュラント先輩……！」

俺たちが優しい言葉に感動していると、シエナ先生はムツとした顔をする。

「ライオネル。せつかく引き受けてくれたのに、余計なことを言うな」

「生徒は教師からのお断りを断りにくいから、念のためですよ」

デュラント先輩はそう言つて、上品な微笑を浮かべる。

二人のやり取りを見ていると、どちらが年上かわからなくなるんだよね。

「鉱石市には興味があるので、お使いは構いません。でも、こういった品を買ってくればいいんですか？」

俺が聞くと、デュラント先輩を睨んでいたシエナ先生が、こちらに顔を向けた。

「お前たちが気になったものを適当に買つてきてくれればいい」

俺たちは驚いて、目を瞬かせる。

「気になったものを適当に……ですか？」

「鉱石の種類とか、書物の内容とか、指定もないんですか？」

「僕たちにおまかせで大丈夫ですか？」

俺とアリスとトーマが確認すると、シエナ先生は頷く。

「皆、私がつ持っている鉱石や書物の類は、把握しているだろう？ フィルやカイルやアリスは希少な鉱石を見極める能力を持つているし、トーマは面白い書物を見つける力がある。ライラは商人の目で変わった商品を探してきてくれるだろう」

すると、レイが自分を指して叫んだ。

「俺への期待はないんですか!？」

シエナ先生は思い出した顔で、「ああ」と声を漏らす。

「レイは運がいいから、それを期待している」

他のメンバーが個々人の能力なのに、レイは運なのか。

しかし、彼は嬉しそうにガッツポーズを作った。

「よし！ 俺もシエナ先生に期待してもらえてる！」

……レイがいいなら、いいか。

シエナ先生の期待に応えられるかわからないけど、俺もいいものを見つけたいな。

鉱石市に行くのが、今から楽しみだ。

2

テレーズ女王陛下から招待状を受け取った翌日。

マクベアー先輩のスケジュールが空いていたので、三人でステア王城に行くことになった。
 只今、俺とカイルとマクベアー先輩は、デュラント先輩が手配してくれた馬車に乗って、お城に向かっている。

目立つことが苦手な俺に気を使ってくれたのか、馬車は貴族用の中でも装飾が控えめだった。それでも、寮の前に迎えが到着した時、生徒たちはちよつとざわついていたけどね。
 帰省で寮生が減っている時でよかった。

馬車に揺られながら、俺の対面ではマクベアー先輩が襟元をいじっている。
 今回はプライベートな招待なので、平服でいいと言われていた。

だが、礼服とまではいかないものの、ある程度フォーマルな格好でなくてはいけない。
 マクベアー先輩は普段、シャツの襟元のボタンは外しているから、違和感があるんだろうな。
 「デュラント先輩に会いに王城に行く時は、こういう格好をしないんですか？」

王族と騎士家、身分は違うが二人は幼馴染み。

シエナ先生のように、マクベアー先輩も外出ができないデュラント先輩の話し相手として王家に招かれていたんだよね。

よく王城にも訪れると聞いていたが、その時は平服ではないんだろうか。

俺の疑問に、マクベアー先輩は襟元を触りながら答える。

「ライオネルの部屋で話すだけだからな。普段着で許してもらっている。入る時も裏門が多い。この前、フィルやカイルと一緒に通った門だ」

あっちの入口からか。

前回、俺とカイルがステア王城に来たのは、アルメテロス探索の時。

王城の古い図書室にある避難経路から、アルメティ神殿に行けるということで、城を訪れたのだ。その時点では、アルメテロス探索の件は、デュラント先輩のご家族にはまだ内緒だったんだよね。だから、人気のない真夜中に裏門からこっそり入城したのである。

あの時は、こうして昼間に、お城の正門から入る日が来ると思わなかったなあ。

他国のお城見学、楽しみだ。ワクワクが止まらない。

馬車の小さい窓から外を見ると、ステア王城の正門が大きくなってきた。

王城の正門の前には堀があり、大きな跳ね橋がかかっている。

夜になると橋につながれた鋼鉄の太い鎖に引かれて橋は上がり、渡れなくなるのだ。
 橋の手前には兵士が数名いた。彼らの前で一旦馬車が止まり、馭者と何か話している。
 やがて入城の許可がおりたのか、再び馬車が動き出した。

それと同時に、橋の向こう側にある城門の大きな両扉がゆっくりと開いた。

城門を潜り、石畳の道を進む。

道は曲がりくねっており、馬車一台が通れるくらいの狭さだ。

古いお城は、防御の観点からこうして侵入者が入りにくい造りをしていることが多い。
 ステアもお城の建設時は、要塞としての役割を求められていたのかもしれないな。

馬車が城の玄関部分で停車した。

扉を開けて外に出ると、衛兵と一緒にデュラント先輩とセオドア殿下が立っていた。王子様自ら、俺たちを出迎えてくれるなんて。

「いらつしやい」

「ようこそステア王城に」

デュラント先輩とセオドア殿下が、馬車を降りた俺たちに微笑む。

俺とカイルは二人に向かつて、お辞儀した。

「お招きありがとうございます」

「ありがとうございます」

マクベアー先輩はステア王国の騎士家の子息らしく敬礼をする。

「招待いただきありがとうございます」

それを見て、デュラント先輩とセオドア殿下は笑う。

「かしこまった姿のマクベアーは久々に見るね」

「いつもみたいに普段着で来ると思ったよ」

そう言われて、マクベアー先輩は頭を掻く。

「女王陛下からのご招待で、普段着はさすがに……」

困った様子を見せる彼に、デュラント先輩はくすつと笑った。

「マクベアーもお祖母様に会うのは久しぶりだもんね」

「三人が来るのを、皆が楽しみに待っているよ。さあ、案内しよう」

セオドア殿下の案内で、俺たちは城内へ足を踏み入れた。

やはり昼間の城内は、前回とは雰囲気が違うな。

窓から入る光で、城内はとても明るかった。壁の色や、天井の装飾の細部までよく見える。

前はゆっくり見学するどころではなかったからなあ。嬉しい。

俺は失礼のない程度に、さりげなくあたりを見回す。

天井には白い漆喰細工が施されている。

細やかな彫刻がなされた装飾は、植物をモチーフにしているようだ。

茎の曲線と花の模様が絡み合って、優美でどこか可愛らしい印象を受ける。

正門がある南側の内装から推察するに、こちらは新しく改装されているのかも。

前回見た裏門側——北側の建物は、ステア王国建国初期の建築のようで、重厚感ある内装だったんだよね。

歴史を感じられる内装も素敵だったけど、こっちの明るくて柔らかな感じも好きだなあ。

どこか、テレーズ女王陛下下の印象と重なる。

廊下の窓から見える中庭も、とても素敵だ。

丸く整えられた低木と、青々とした芝生。それから色とりどりの草花が咲いている。

奥にある白いドーム型のガゼボには、白いベンチにクッションが置かれていて、気軽に休憩できるようにになっているみたいだ。

あそこに座って、のんびりできたら気持ちよさそう。

そんなことを考えながら歩いていると、先頭を歩いていたセオドア殿下が通路を右に曲がった。マクベアー先輩がその後ろを追いつながら、ボソツと呟く。

「あれ、今日は謁見の間じゃないのか」

それが聞こえたのか、デュラント先輩が顔だけ振り返って微笑む。

「フィル君もカイル君もマクベアーも、堅苦しいのは苦手だろう？　だから、今回は私たちの家族の間にしたんだ」

お城の中にはだいたい、政治的なことに使われる公的なスペースと、王家の方々が使う居住スペースがある。

すごい。通常なら、家族以外では親戚や親しい友人だけしか通されることのないプライベート空間に入れてくれるのか。

俺たちへの気遣いが、とてもありがたい。

しばらく進むと、二人の近衛兵が両開きの扉のサイドに立っているのが見えた。

近衛兵は俺たちを視認して部屋の中に向かい、到着を告げてから戻ってくる。そして、扉を開けた。

まず正面に暖炉が見えた。

今は夏なので火は入っていないが、三つの頭の鳥が彫刻された重厚感のある暖炉だ。

その右側には、白に金の模様が入ったローテーブルと、それを挟んで花柄の布が張られた長椅子が二台置かれている。

そんなテーブルセットの手前に、ステア王室の皆さんが横一列で並んでいた。

「今日はお招きいただき、ありがとうございます」

「お招きありがとうございます」

マクベアー先輩に続いて挨拶して、俺とカイルはお辞儀をする。

「招待に応じてくれてどうもありがとうございます。会えて嬉しいわ」

テレーズ女王陛下はそう言つて、俺たちに微笑する。

相変わず可憐な微笑みだなあ。

魔法使いみたいな容姿のゼイノス中等部学校長と、同年代だというのだから驚きだ。

「今日は話ができるのを楽しみにしていたよ」

そう言うマイルス皇太子に、俺はにこつと笑う。

「僕も楽しみにしていました」

マイルス皇太子は嬉しそうに笑い返してくれた。

デュラント先輩は、お父さんと似ているんだよね。

一見クールそうに見えて、笑うと途端に優しい印象になるところが一緒。

マイルス皇太子の隣にいた女性が笑みを浮かべた。

「アンヌです。ライオネルから、いつもあなたの方の話は聞いていますわ」

この方が、デュラント先輩のお母さんかあ。

涼やかな顔立ちで、とても綺麗で知的な雰囲気がある人だ。

ダークブラウンの髪をロールアップにまとめている。

俺はアンヌ皇太子妃に向き直って、頭を下げた。

「はじめまして。よろしく願います」

それにしてもデュラント先輩、ご家族にどんな話をしているんだろう。気になる。

そして、その隣にいるのが二番目のお兄さんのイグナシス殿下か。

肩につかないくらいの長さの髪を、短く一つに縛っている。

細い黒縁のスクエア型のメガネをクイツと上げ、彼はジッと俺とカイルを見つめた。

「はじめまして、イグナシスだ。君が噂のフィル君で、隣が従者のカイル君か、会うのを楽しみにしていたよ」

う、噂の!? デュラント先輩、本当になんの話をしているのお。

心配する俺に、デュラント先輩は笑顔を見せる。

「フィル君とカイル君とは、一緒にクラブ活動をしていたし、行事の協力もしてもらっているからね。話題に出す機会が多いんだよ。だけど、安心して。私が感動したことや、感心させられたことを話しているだけだよ。陰口とか悪い内容じゃないから」

デュラント先輩は陰口を叩くような人ではないと思っているけど……。

どんな内容なのが気になる。

セオドア殿下がクスクスと笑って、弟の話を肯定する。

「ライオネルが言っているのは、本当だよ。前にフィル君に話したことがあるだろう? ライオ

ネルはフィル君のことばかり話すって。多分、それと同じように、君たちについて話しているんだよ」

ああ、そういえば、セオドア殿下に聞いたことがあるな。

セオドア殿下は国外の公務に出ていたり、デュラント先輩は寮に入っていたりで、会って話す機会が少ないという。

数少ない機会で会うたびに、俺の話題が出るみたいなんだよね。

デュラント先輩が俺のことを、『自分の知識の及ばないことを考え出す、とても興味深い子』で『優しくて、傍にいと居心地がいい』って言っていたと教えてくれた。

「フィル様だけではなく、俺のことも話題に上がっているんですか?」

自分を指さすカイルに、セオドア殿下は頷く。

「そう。君のことも剣術の才能があると、いつも褒めているよ。忠義に篤い性格だとも」

忠義に篤いと言われ、カイルは嬉しそうな顔をした。

それに反して眉を顰めたのは、デュラント先輩だ。

「セオドア兄様。前にフィル君と話したって……。フィル君たちにいったい何を話しているの?」

その声のトーンの低さに、セオドア殿下はしまったという顔をする。

「グレスハートに行った時、ちよっとライオネルの話になっただけだよ。ライオネルだって、フィル君たちのことを話題にしていたんだから、おあいこだろう?」

「それはそうだけ……」

そう言いながら、デュラント先輩はチラツと俺たちを見る。
デュラント先輩の、こんな気恥きはずかしそうな表情は見たことがない。

いつもクールに見える彼が、なんか可愛いぞ。

珍めづしく思おもってジツと見つめ返すと、デュラント先輩は小さく咳せき払いした。

「お祖母様、立ち話もなんですから座って話しませんか？」

あ、話をそらした。

テレーゼ女王陛下は孫の意図を察したのか、クスクス笑う。

「そうね。まずは座うまがって、お茶を飲みながらお話をしましょう」

セオドア殿下に促うながされて、奥からカイル、俺、マクベアー先輩の順で長椅子につく。

対面する長椅子には、真ん中にテレーズ女王陛下が、右隣にマイラス皇太子とアンヌ皇太子妃、左隣にセオドア殿下とイグナシス殿下が腰掛けた。

もう一人座れそうだったけれど、デュラント先輩はマクベアー先輩の隣に座る。

皆が着席すると、マイラス皇太子がベルを鳴らした。

それを合図に、給仕のメイドが入ってきて、テーブルにお茶の準備を始めた。

待つ間、俺は改めて部屋の中を見回す。

ステア王家の家族の間は、暖炉があるほうの壁以外は全て本棚になっていた。

窓は長方形のものが、暖炉側の壁の足下に四つあるだけ。

だからか、昼間だというのに、部屋の中はランプがいくつも灯ともっている。

グレスハートの図書室の窓が、こんな感じだったなあ。

太陽の光で、本を傷いためないための工夫だと思われる。

新しいデザインの本もあるけど、古い装丁の本もあるもんね。

天井近くにある金色の縁ふちの分厚い本なんか、特に古くて貴重そうだ。

王城の中には図書室がいくつもあるとか、女王陛下の執務室しつむしつにも書庫があるとか聞いていたけど、

家族の間もほぼ図書室だよな。

さすが学問の国と呼ばれる、ステア王国の王室だ。

俺が感心しているうちに、準備が整ったらしい。

メイドさんたちが部屋を退出して、俺たちだけになった。

テレーズ女王陛下はこちらに向かって微笑む。

「まずは、お茶とお菓子どうぞ召めいし上がって」

ちょうど喉のどが渴かわいていたところだったんだよね。

「二、ありがとうございます」

俺とカイルとマクベアー先輩は、お礼を言ってお茶をいただく。

夏のハーブティーには、フレッシュミントが入っていることが多い。このお茶もそうだった。
フレッシュミントは乾燥かんそうしているミントより、主張が強くて好きた。

喉のどにちょうどいい清涼感せいりやうかんを感じる。

喉のどが潤うるったところで、焼き菓子を摘つまんでみる。

これは、ステア王国伝統のお菓子。

ポルボルという名前の、一口サイズのキューブ状のクッキーだ。

ナッツとドライフルーツと砕いた押し麦などが入っている。

寝食を惜しんで研究に没頭する研究者たちが、手軽に食べられる栄養のあるお菓子として流行ったものらしい。

言わば、栄養補助食品である。

甘くて食べ応えがあつて、とても美味しい。これで栄養も補えるのって便利だね。

まあ、開発された経緯を考えると、ちよつと研究者さんたちの食生活が心配になっちゃうけど。

補うだけならいいけど、中にはこれだけつて人もいるらしいもんなあ。

研究で忙しいだろうが、できればいろんなものをバランスよく食べてほしい。

すると、マイラス皇太子が俺とカイルを見つめ、微笑んでいることに気がついた。

俺は咀嚼していたポルボルを、ゴクンと呑み込む。

あたたかな眼差しではあるが、どうしてそんなに見てくるんだろう。

アンヌ皇太子妃もそれに気づいたようで、優しく夫を窘める。

「殿下、そう見つめられては、お茶が飲みにくいですわ」

その言葉に、マイラス皇太子はハツとした。

「ああ、すまない。対抗戦の選手として活躍していた君たちが、グレスハートのフィル殿下とその従者なのかと思つてね。以前君たちと挨拶した時は知らなかったから、今回本当に驚いたんだよ」

そう言つて、感心した様子で俺たちを見つめてくる。

今回、アルメテロス探索の件を王家の皆さんに説明する時、俺たちの事情は事前に伝えていた。

俺がグレスハートの第三王子であることや、精霊のヒスイと召喚契約をしていること、カイルが俺の従者で獣人であることを、だ。

どこまで話すかは、ちよつと迷つたけど。

俺がグレスハートの王子であることをテレーズ女王陛下はすでにご存じだったし、第三王子の従者が獣人であるという話は他国に知られていることだ。

それに、アルメテロスのいた扉は精霊でなければ開けられないのは、ステア王家の人間は皆知っている。だから、ヒスイの説明は避けられない。

そこで、これらのことをすべて話してしまおうと思つたのだ。

そうかあ。前回マイラス皇太子にお会いした時、もしかして俺の素性を知っているのかなと思つてビクビクしていたのだが、あの時はまだ知らなかったのか。

「陛下も教えてくださればよかったのに……」

マイラス皇太子が小さく息を吐くと、テレーズ女王陛下はいたずらっぽく笑う。

「グレスハートのマティアス国王から、『普通の生徒のように静かに過ごさせてあげてほしい』という希望があつてね。事情を知る人間は、極力少ないほうがいいと思つたのよ」

父さんは入学する前から、テレーズ女王陛下に俺やカイルのことについて、手紙で伝えてくれていたらしいもんなあ。

ありがとう。父さん。

俺は頭に父さんを思い浮かべ、感謝する。

すると、隣に座るマクベアー先輩が覗き込んできた。

「普通の生徒として過ごす……か。グレスハート国王陛下の願い、いつか叶えてあげられるといいな。フィル」

ボンと肩を叩かれ、俺は目を大きく見開く。

「え！ もう叶えていませんか!?」

普通の生徒として過ごしてきたつもりなんだけど！

俺の反応に、マクベアー先輩とデュラント先輩は困り顔で顔を見合わせた。

「フィルは何かと注目されているしなあ。一般的な普通の生徒とは違うような気がする」

「全てにおいて能力値が高いから、私をはじめ、皆から頼られているしね」

その言葉に、セオドア殿下はしみじみと呟く。

「アルフォンス先輩とは違った意味で、フィル君は目立つよねえ」

そりゃあ、学校内で頼まれごとをしたり、面倒ごとに巻き込まれたりはしている。

そのせいで目立つ時があることも認める。

だけど、それ以外は大人しく過ごしているよ？

アルフォンス兄さんとは、比べられるまでもないはず。

俺の心の声を読んだかのように、カイルが顔を寄せ、真剣な顔で言う。

「フィル様。一瞬の、平穩では、叶ったことにはならないですよ」

ひとつひとつ言葉を句切って、言い聞かせるように言わなくても。

そんな俺たちの会話が聞こえたらしいテレーズ女王は、クスクスと笑う。

……女王陛下に笑われてしまった。

小さくショックを受ける俺に、テレーズ女王陛下は気がついたようだ。

「ああ、笑ってごめんなさい。入学する前のお手紙で、マティアス国王から『規格外なことをする子だから、あまり驚かないでください』と書いてあったのを思い出してしまってたね」

父さん、さっきした感謝を、撤回してもいいだろうか。

そんなことまで、テレーズ女王陛下に伝えなくていいじゃないかあ。

「あの時は驚いてしまったものだけど。心配するのも当然なのかもしれないわね。最年少で対抗戦のメンバーになったり、コタツやカレーを開発したり、本当にびっくりすることが多かったもの。

マティアス王の言葉に嘘はなかったと、納得してしまっただけだよ」

テレーズ女王は口元に手を添えて、優雅に笑う。

……納得してしまわれましたか。

俺、そんなに規格外なことしているかなあ。

しょんぼりしていると、マクベアー先輩が大きな手で俺の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「フィルというと驚かされる時も多いが、何が起こるかわからないから面白いぞ。はっはっは！」
快活に笑うマクベアー先輩の言葉に、デュラント先輩も微笑んで同意する。

「確かに、そうだね。フィル君のおかげで、学生生活は素晴らしい思い出ばかりだ。寮の沐浴場を
オフロに改装したのも楽しかったし、冬には雪釜の中でコタツに入ったこともあったね」

マクベアー先輩とカイルが、コクコクと頷く。

すると、セオドア殿下は羨ましそうな顔をした。

「フィル君と過ごす日々は楽しそうだなあ。僕はアルフォンス先輩とルーゼリアの板挟みで、苦勞
した思い出ばかりだよ」

ため息を吐くセオドア殿下に、イグナシス殿下が言う。

「学生の頃、僕にはセオドア兄様が活き活きしているように見えたけどね」

それを聞いたセオドア殿下は、信じられないと大きく目を見開いた。

「活き活きだって？ 確かに、アルフォンス先輩の能力の高さや発想力は素晴らしいと思っ
てい、尊敬もしている。クラブ活動だって、やり甲斐を感じていたよ。でも、それと同じくらい、頭
を抱えることが多かったんだけど！」

自分がいかに大変だったか、セオドア殿下は強く訴えた。

以前彼から、アルフォンス兄さんの学生時代の話を聞いたことがある。

なんでも、ルーゼリア義姉さんがアルフォンス兄さんに毎日のように勝負を挑みに来るから、そ
のたびにセオドア殿下は審判をさせられていたそうなんだよね。

多分、他にもいろいろあったんだろうなあ。

セオドア殿下は当時を思い出しているのか、額を押さえながら「あの時もそうだし、あの時

も……」とブツブツ呟いている。

イグナシス殿下はクスクスと笑う。

「そうなの？ だけど、僕は羨ましかったよ。僕の在学時には、周りにアルフォンス殿下やフィル
君のような生徒はいなかったからなあ。アルフォンス殿下が在学中は中等部だったし、フィル君が
入学してきた時は高等部を卒業していたしね」

それを言ったらデュラント先輩も、体の弱さで入学が遅れなければ、俺と中等部の在籍期間がか
ぶることはなかったんだよね。

運命の巡り合わせは不思議だ。

しみじみと考えていた俺に、イグナシス殿下が尋ねる。

「ねえ、フィル君。グレスハート王国には、僕に近い年齢のヒューバート殿下がいらっしゃるけ
ど……彼はステアに留学する気持ちはなかったの？」

年の近いヒューバート兄さんがステアに留学していれば、自分もそんな学生生活が送れたかもと
でも考えたのだろうか。

ヒューバート兄さんがもしステアに来ていたら……か。

そもそもステア王立学校は大陸でもトップレベルの学力。

難関校の入学試験に、勉強嫌いのヒューバート兄さんが合格できるかなあ。

グレスハートでも家庭教師から逃げ、課題を投げ出し、密かに街に繰り出しては父さんに怒られ
ていた人である。

仮にステア王立学校に合格し、入学したとて、授業や課題の多さに三日でギブアップするのではなからうか。

よくよく考えた俺は、イグナシス殿下に微笑んで答える。

「留学の気持ちはなかったと思います。ヒューバート兄さまは昔から、早く軍に入って経験を積みたいと言っていました。小さい頃から『ゆくゆくは自分が立派な將軍となり、アルフォンス兄上を支える』と決めていたそうです」

「ヒューバート殿下は、しっかりとした目標があるんだね」

イグナシス殿下が相槌を打つと、テレーズ女王やアンヌ皇太子妃、マイラス皇太子も感心した様子だ。

「素晴らしい目標だわ」

「兄君を支えるため、努力されているのね」

「グレスハート王国は、兄弟の仲がいいんだね」

微笑む三人に、セオドア殿下は大きく頷いてみせる。

「ええ、とても仲がいいです。特に兄姉たちの、フィル君の溺愛^{できあい}っぷりはすごいんですよ。僕がステアに帰る時も、一緒についてきそうな勢いでしたからね」

「セオドア殿下、バラさないでください！」

身内のブラコンぶりを暴露^{ばくろ}されて、俺は羞恥^{しゅうち}で顔が熱くなった。

イグナシス殿下は興味深そうに尋ねる。

「アルフォンス殿下が弟君を溺愛^{できあい}されているのは学校でも有名な話だったけれど、他のご兄姉もそうなのかあ」

「え！ そんなに有名だったんですか？」

当時中等部に在学していたイグナシス殿下まで噂が届いているって、相当じゃない？

驚く俺に、イグナシス殿下とセオドア殿下がさらに続ける。

「うん、かなり有名だったよ」

「そうだね。クラブの名前がアルメテロスクラブになっても、クラブ活動の主軸^{しゅうしよく}である、『弟に尊敬される兄になる』って部分は譲^{ゆず}らなかったから」

アルフォンス兄さんが立ち上げたクラブは、アルメテロスクラブという名前に決まる前、兄クラブと名づけるつもりだったらしいんだよね。

名前が変わっても、活動内容が変わらなきゃそうなるか。

納得したが、恥ずかしいんだけど！

俺が顔を覆^{おほ}うと、デュラント先輩は小さく笑う。

「でも、兄弟仲がいいのは素敵なことだよ」

デュラント先輩に慰め^{なぐさ}られ、俺は顔を覆っていた手をそっと下ろした。

……うん。仲が悪いよりかはいいよね。

王族ともなれば、王位を巡って兄弟間で争う場合だってある。

そう考えると、ステア王家の兄弟も仲良しだ。

俺はデュラント先輩とセオドア殿下とイグナシス殿下の顔を見回した。

「皆さんも仲がいいですね。以前、セオドア殿下から甘い薬湯作りの話を聞きました」

デュラント先輩が幼い頃、苦い薬ばかり飲んでるのが可哀想で、セオドア殿下とイグナシス殿下と王宮薬師で甘い薬湯作りに挑戦したんだそうだ。

結局、甘くてまずい薬湯が出来上がってしまったそうだけど、デュラント先輩は頑張って飲んでくれたんだって。

話を聞いた時、なんていい兄弟なんだろうと思った。

しかし、その話をする、イグナシス殿下が額を押さえる。

「ああ、あったね。僕にとつて、それは黒歴史だよ。よく効く薬っていうのは、苦いか渋いことが多いんだよね」

「今のイグナシス兄様が作ってくれる熱冷ましはよく効くよ」

デュラント先輩の言葉に、イグナシス殿下は苦笑する。

「あれは、グレスハートのマクリナの効能が素晴らしいからだよ。僕の功績とは言えない」
そのやり取りを聞いて、俺は驚く。

「イグナシス殿下は、薬の調査ができるんですか？」

薬の調査はほんの少しのさじ加減で、効果が変わるものだ。

場合によっては、人体に悪影響を及ぼす時もある。

俺の問いに、イグナシス殿下は頷く。

「王宮薬師と一緒に、ライオネルが飲む薬の調査だけ関わらせてもらっている。他には、新薬の研究もしているよ。ライオネルの体質が良くなればと、いろいろな薬草の文献を漁っているうちに、新しい薬の開発に興味を持ったんだ」

その話に続いて、マイラス皇太子も教えてくれる。

「マクリナを使ったイグナシスの新薬は、とてもよく効くんだよ。いざ平民でも使えるようにしたいと思っていて、グレスハートのマティアス国王陛下にも話をしているところなんだ。両国で協力して薬を作っていたらいいとね」

「そうなんですか。実現したら、とても素晴らしいですね」

そんな話が進んでいるなんて、全然知らなかったな。

だけど、平民に広く使ってもらうためには、マクリナもたくさん必要になるもんね。

生産国であるグレスハートに話を通しておくのも頷ける。

「マクリナはいろいろな病に効くし、副作用もない。乾燥した葉をお湯でふやかして飲めば、予防薬にもなるっていうんだから。本当にすごい薬草だよ。さっきも言ったように、いろいろな文献を読み漁っているんだけど、その中にマクリナはなかった」

イグナシス殿下の言葉に、俺は微笑む。

「文献がないのも、仕方ないかもしれませんね。うちの王室でも、マクリナの存在がわかったのは数年前なんです。グレスハートの小さな村でしか使われていない、マイナーな薬草だったんですよ」